

## 『中論』観去来品について

田原謙 三

自性空の世界を形成していった。こうした竜樹のこばに對する態度を、たとえばハイデガーの言語哲学と比較するとき、まことに興味つきないものがある。

ところでこの第二章は『中論』の詩頌自体に「余如<sup>ハ</sup>去来<sup>ニ</sup>説<sup>ク</sup> (uktam gamyanāna gatagatāḥ) という言い廻しをもって、四度にわたって引用されており、竜樹自身がいかにも同章を重要視していたかが看取される。こうしたことから、なるほど月称の註釈などにおいては、同章は「不來不去の縁起」を成立させることがその主眼点であったと説いていても、第十九章「時間の考察 (kāla-pari-ṅśa)」のごとく時間論を主題として取り挙げたものではなく、「むしろ三時態による分析を通しての論証法の側面にこそ注意を払う必要がある」という意見もある。たしかに傾聴に値する見解といえよう。

これはポーランドの仏教学者シャイエル (S. Scheyer) の発見でもあるが、概して『中論』には体系的になされた叙述や表現は見当らばかりか、敵者との論争においても、徹頭徹尾アビダルマ論師によって用いられた術語を転用している。こうした傾向は、この観去来品 (Gatagata-pariṅśa) にわたってはことにはなほだしい。この章は、動詞の語尾変化に伴なって表われる過去形現在形未來形の時制変化に綿密な分析を加え、そこに現われているとされる通俗の時間的変易の概念を破壊していくものである。このような時制変化に顕著な動詞は、われわれの国語においてと同様に、存在主体そのものの移行過程を言い表わした「去る」の動詞であろう。竜樹はこの辺を捉え、この「去る」の動詞語根  $\sqrt{\text{gam}}$  の語尾変化で表わされる「sata (すびに去つた)」「agata (いま去らな)」「gamyamāna (去りつつある)」の三時の現象を考察し、それぞれに「gamāna (去るはたらき)」という、これらの三時の現象をそれとして在らしめているところの主体ともいべき自性は存在しないと論証していくのである。竜樹は難解な術語をふりかざすことなく、このような日常生活に立脚した普通に語られ聞かれるところの通俗的な陳述やことを仔細に分析し、破壊しながら、時間論においても縁起無

ところがこの『中論』と前後して成立したと思われる初期のアビダルマ論書、とりわけ漢訳『集異門足論』や『識身足論』あるいは『論事 (Kūṭavāyutha)』などを見る限りにおいては、この三時の問題は時間そのものの議論というよりもつねに五蘊や十二処、十八界などの法と関わった形で提示されていることが解される。つまりブツダが説いたとされるあまたの法を、数の分類によってまとめあげようとしたり、範疇によって整理したり、さらに法そのものに委細な註釈を施したりする傾向が、経蔵の末期から論蔵期にかけて生じた。こうした思想的な作業の痕跡は、経蔵の長阿含『衆集経』や『十上經』などにも明らかに見て取ることが出来る。この諸法の整理組織化という作業のある途上において、三時の問題が関わってきたらしい。たとえばこれに関する簡略な描写を、『識身足論』は有

部の立場から投げかけている。

この点は『論事』においてはことさらに顕著といえる。同論書における三時の議論は、覺音(Buddhaghosa)の註釈によれば過去と未來は無であると主張する分別上座部と、過去未來は現在と同様に有であると反論する説一切有部との間の問答往復であるらしい。ここでもその主題は法の三時態に関するものである。分別上座部は「過去の色(atītam rūpam)は滅した、落謝した、変易した、没した、すでに去った」ものであり、また「未來の色(anāgatam rūpam)は未だ生ぜず、未だ在らず、未だ現われず、未だ現起せず、未だ顕現せ」ざるものであるからともに無であるという。これに対する有部の反駁は、過去とか未來とかいう時間そのものの有無をいうのではなく、過去未來現在の三時現象はすべて蘊・処・界などの法として、あるという内容を主張する。これに関する煩瑣な議論がまんべんなく繰り返されたのち、有部は経証として相應部經典を掲げる。それには「比丘衆よ、すべていかなる色の過去未來現在(atītaṅgatapaccuppannaṃ)内外麁細劣勝遠近なるを色蘊といふ。すべていかなるも受の、すべていかなるも想の、すべていかなるも行の、すべていかなるも識の過去未來現在内外麁細劣勝遠近なるを識蘊という。」とある。この經典は五蘊の法に対する註釈その内容として、ところから、おそらく経蔵末期に属する作品と思われるが、ここで解されることは、色ないし識の概念が両重構造において捉えられていることである。つまり過去未來現在の三時において時間的に存在するもの(das Seinde)としての色と、そうした三時の色を存在の法として、括った場合の色蘊としての色とである。すなわち分別上座部は、前者の存在するものとしての色の立場

『中論』観去來品について(田原)

から過去未來の無をいい、他方の有部は、後者の存在の法としての、色蘊の色の立場から三世(時)ともに有であると主張しているように思われる。ともあれここにおいても議論の主題は、時間現象そのものに関する有無を論じているのではなく、あくまでも法の解の相違にもとづいて論議されていることが知られる。

惟うに、そもそも初期仏教に説かれた五蘊の法は、主観と客観とを問わない一切の無常苦無我をさされる宗教的叡知の高次の立場から、いまここに、いるわれの生存(Existenz)の在り方を示したものであつて、それが認識論的な方向からは十二処とか十八界と称されたと考える。従つて本来これらの法は、われの生存の構成内容を時間的現象と空間的現象とに分化する以前の端的な在り方を示したものであり、いわば主体的に把握せられたものといつてよい。ところが経蔵末期から次第にアピダルマ的色彩が濃厚になり、これらの法が機械的に分類整理されるといふ趨勢にもなつて、本来の主体的に捉えられた法に対する対象論理的な態度が見られるようになった。さらに輪廻的な考え方も加わつて、法が時間の経過において有であるか無であるかが盛んに論じ合はれるようになったと考える。

竜樹が第二章において *gatā, agatā, ganyamāna* の三時に *ganāna* という自性は存在しないと論証するのは、もとより時間現象そのものの探求ではないであらう。そうではなく、本来は時間的側面から取り挙げるのでできない主体的に把握せられた法を、さらに時間の組上において論じるという、法そのものに対するアピダルマの対象論理的な態度を批判した。婉曲的な方法ではあるが、いわば膠着化した法の恢復を、同章において企図したのではないかと考える。(註記略)

(駒沢大学大学院修了)